

読書ノート

佐藤博樹/佐藤厚/大木栄一/木村琢磨 著

『団塊世代のライフデザイン』

——決して一律でない就業志向と、夫婦間の思惑の差

戎野 淑子

(嘉悦大学経営経済学部助教授)

この本は、来年（2007年）から60歳を迎える団塊の世代について、大規模な意識調査を基にこれからの動向を探求しているものである。団塊の世代に関しては、これまでも種々の研究が存在するが、それらは個々人に焦点を当て包括的に分析したものが多い。それに対して、本書では、「世帯」という視点を強く取り込んでいることが大きな特徴となっている。そして、各章において、研究者が各々の問題意識に基づいてユニークな分析を展開している。そこで、簡単に各章について紹介していこう。

第1章では、夫婦の現在の就労類型別に、60歳代に希望するライフスタイルを分析している。60歳代について、妻が夫に対し希望する働き方は、夫自身の希望とほぼ同じ正社員が多いが、妻のほうが期待する割合がやや高い。他方、夫が妻に期待する働き方は、妻本人の希望とほぼ対応はしている。しかし、専業主婦の場合、夫はそのままの状態を望んでいるのに対し、妻はパートタイムや嘱託、ボランティア就労などの社会参加を希望している人も多く、双方の意向に乖離があった。このように、夫婦の考え方には、共通点と共に微妙なずれも存在していることが明らかになっている。

第2章では、現在正社員の女性が、高齢期にいかなる働き方とライフスタイルを考えているのかについて検討を行っている。高齢期の就業に関する研究は、これまで男性を中心に検討されたものが多いのに対し、女性に焦点を当てていることが特徴的である。そして、女性の就業意識には、世帯収入の違いが大きく影響しており、収入の高い者ほど引退志向が強いという特性があった。

第3章では、男性正社員について、彼らの持つ就



●中央法規出版
2005年12月刊
A5判・138頁・1890円
(税込)

●さとう・ひろき 東京大学社会科学研究所教授。
●さとう・あつし 同志社大学大学院総合政策科学研究科教授。
●おおき・えいいち 職業能力開発総合大学校能力開発専門学科助教授。
●きむら・たくま 東京大学社会科学研究所・日本学術振興会特別研究員。

労働によって5タイプに分類を行い、特徴を明らかにしている。一般に、団塊の世代は「会社人間」や「仕事人間」として捉えられることが多いが、ここでは、そのほかに専門職志向タイプや仕事以外に生きがいを持っているタイプなども存在していることが明示されており、高齢期の就業のあり方を考えるにあたっては、年齢要因のみではなく、生活や就業に関する意識を考慮することが必要であると述べられている。

第4章では、就業先（民間企業に正社員として勤務する男性、女性、公務員等）によって異なる高齢期の就労希望の特徴を分析し、政策的提言を行っている。労働者の高齢期の就労ニーズは、「今の勤め先における雇用の見通し」によって大きく影響を受けるが、「見通しが分からない」者が約半数もいた。また、そのうちの45%程度がフルタイム就労を希望している。将来ビジョンを立てるためには、高齢期の雇用見通しが早期に提示されることは重要であり、就業希望人数や希望内容を踏まえた人事管理、ならびに雇用政策が求められていることなどが指摘されている。

第5章では、老後の生活不安を解消する条件について究明されている。60歳代前半の雇用には、企業は多様就業型ワークシェアリングの導入など、人事管理全体の見直しや業務のあり方の工夫が必要であり、労働者には年齢にとらわれない就業意識が求

められていること等が記されている。

本書を読み終えると、団塊の世代のライフスタイルの解明に留まらず、「家族は今後どうあるべきなのか」という問題も、我々に投げかけていることに気づく。社会における基本的単位である世帯（家族）をもって、生活・就業のあり方を認識していくことは、今後の動向を探る上で極めて現実的であり、現在抱える課題を分析する上でも非常に有効であると思われる。

今日の日本社会において、家族像の中長期的なビジョンの構築は緊要な課題であり、本書はそのような視点を含めた分析が進められた希少な研究である。つまり、団塊の世代のこれからの夫婦の暮らしについて検討されていることは、高齢期における一つの家族像が示唆されていることでもあろう。今日薄れがちな“世帯”という視点からの分析が、今後とも進展することが期待される。